

日本の近代書物の誕生 5——洋式製本の定着と画像表現

大阪芸術大学 文芸学科 教授 福江 泰太

明治期の洋式製本の流れは、簡易洋装本を中心とした流れ、本格洋装本を目指した流れの二つが、初期から併存していたが、日露戦争後にそれが一つに収斂していったといえる。

まず、簡易洋装本とは、ボール表紙本に代表されるように、製本様式としては「平とじ」を特徴とする。平とじをするための穴の数や平とじで結束するための素材（紙縫り、木綿糸、ステープラー）について、木戸雄一は「明治期「ボール表紙本」の製本」（「調査研究報告書」21号、2000年9月）や「明治期「ボール表紙本」の誕生」（『明治の出版文化』（臨川書店、2002年3月）で、丹念に調査している。しかし、手製本の経験者であれば、平とじの穴数やとじ紐の素材はさほど問題にならないことがわかる。それらは便宜的なものに過ぎないからだ。平とじという製本様式の意味は、和本のとじ方（四ツ目綴じ、康熙綴じなど）を簡略化した、折丁の背ではなく、背の側面を綴じつけるものだ、という点にある。和本の職人でも洋本の職人でも、あるいは製本術に不案内な者でも可能な一番簡便な（原初的な）製本方法である。後述する「本かがり」や「抜き綴じかがり」は、折丁の背をかがり、左右の折丁を結束する支持体を必要とし、その支持体をかがり糸がくぐっていく、という製本術に比すれば、その簡便さがわかるだろう。

また、ボール表紙本は、その外観が特徴的である。表裏の表紙の素材は板紙で、板紙の生産が始まるまでは、何枚もの紙を貼り合わせ厚紙状にしたものを使用した。明治20年代にクロモ石版印刷が盛んになると、派手な図柄を表紙用紙に印刷し、板紙に貼ったものが表紙とされた。そして、表裏の表紙をリボン・クロスで繫ぐ。ここで問題となるのは、リボン・クロスの背に書名等が入っていないことだ。背に書名を入れるという習慣は、ボール表紙本では見かけない。これは、以前に言及したように、書架に背を正面にして垂直に立ち、その背には書名等が入っている、という洋装本の、現代では普通のあり方だが、西欧においてもこうした本の佇まいに至るまで長い変遷があったこと、日本における反映でもある（和本は書架に立つことなく、平積みされ、背には書名はなく、必要の応じケシタ・地に覚えの書名が墨書された）。ボール表紙本の本文部と表紙の接着法は、見返し用紙による接着とリボン・クロスの背の芯紙と本文部の背の直接接着で、表紙にミゾがあるもの、ないものとあるが、簡便な「くるみ製本」（「とじつけ製本」に対しての名称で、現代の並装本の製本法を指さない）といえる。

こうしたボール表紙本を中心とした簡易洋装本は、1800年代後半に移入された英語のリーダーをはじめとした、いわゆる「テキストブック」の外観をまねたのではないかと想像され、民間の書肆を中心に盛んに制作された。

対して、本格洋装本へのアプローチは、簡易洋装本の制作よりも早くに始まっており、官が主導して着手したと考えられる。例えば、文久2年（1863年）、洋

書調所から刊行された堀達之助編『英和对訳袖珍辞書』は、両面印刷で、1折り24頁40折の大部のものであり、影印（『英和对訳袖珍辞書』の遍歴』1999年6月）では、かがり穴がうかがえることから、本かがりで本文部を閉じつけたことがわかる。現存が確認されている15冊のうち「原装」は存在していないので、「くるみ製本」なのか「とじつけ製本」なのか不明なのは残念だ。1折り24頁という特異な面付は、蕃書調所の活字御用掛を援助したポルトガル人ダ・ローザだと推定されるという（高野彰、『英和对訳袖珍辞書』の遍歴』中の引用による）。開国期にはダ・ローザのような西欧人が製本術を伝授したことは想像に難くない。明治政府の本格的洋装本製本術の移入は、印書局に、W.F.パターソンをお雇い製本教師として招く明治6年から本格化する。パターソンの指導によって刊行された全革装の『仏蘭西法律書』上下巻（明治8年4月、印書局印行）は「とじつけ製本」で、背革コーネル装の『泰西政学』（明治8年4月、翻訳局訳述、印書局印行）は「くるみ製本」で仕上げ、2つの製本術を伝授していたことがうかがわれる。この当時、西欧においてもくるみ製本術が主流のため、とじつけ製本術で作られた本は稀である。そして本文部はどちらも「本かがり」で結束されている。明治6年は、民間の日就社（のちの読売新聞社）より子安峻・柴田昌吉の『附音挿図英和字彙』が刊行された（1月）。初版は全革装であったが、好評をもって迎えられ版を重ねることになるが、奥付や扉を変えずに、装幀を背革装に変え、刊行されている。

こうした本格洋装本は、外国語辞書や法律書、医学書など、国家建設において大切なジャンルの書物を中心に刊行されていくが、徐々に革で装幀する書物よりも「布クロス」（「紙クロス」に対しての語で、素材は布）で板紙の表紙に貼り、背に箔押しをする洋装本が主流となる。この時期が日露戦争後といえよう。同時にかつて盛況であったボール表紙本も影を潜めて、洋装本といえば、現在でいうところの「クロス装の上製本」で、背に箔押しを施したものが定着する。本文の結束は、本かがりを簡便にした、2折りを1単位としてかかっていく「抜き綴じかがり」が主流となる。

印刷においても、この時期には、網点を用いる写真製版が一般化し、画像表現のために、これまで銅版印刷、石版印刷、木口木版印刷と辿ってきた印刷方法が、すべて写真製版法に収斂することになる。本文は鉛活字で組み、写真は網点による製版で凸版を起こし、それらをステロ版で複製したものを版として印刷するという、一連の印刷法は、写真植字や電子組版が始まるまで（つまり活版印刷が終わるまで）長い期間主流となる印刷方法である。製本術は、本文については、機械かがりが始まるまでは、抜き綴じかがりが行われ、本文部と表紙の接着はくるみ製本となり、印刷、製本とも、日露戦争後に定着する。

日本はわずか40年余りで、近代的書物の姿を整えたことになる。